

「若紫」巻の注釈・引用・話型

——プレテクト『大和物語』の想像力——

(2003年10月31日受付、2003年12月1日受理)

東原 伸明

Annotation, Citation, and Story Types in the Volume of “Wakamurasaki”:
The Imagination of *Yamato Monogatari* as a Pre-text

Nobuaki HIGASHIHARA

(Received on October 31, 2003; Accepted on December 1, 2003)

要 旨

『源氏物語』『若紫』巻には、『古今和歌集』仮名序所収の手習歌「浅積山」を、典拠として指摘している場面がある。ところが、若紫母子の物語全体を生成するプレテクトとしては、同じ手習歌「浅積山」を共通とする『大和物語』百五五段の方がよわしい。しかし、従来の注釈では和歌は典拠となっても、物語文学の方は典拠とされてこなかった。小稿は注釈という行為、ないしは注釈という装置の限界の事例として、『大和物語』の引用による想像力を、話型という視座から論じてみたものである。

In the volume of “Wakamurasaki,” *Genji Monogatari*, there occurs a scene whose source has been said to be a study piece (tenarai-uta) “Asakayama” carried in *Kokin Waka Shu*. Closely examining the volume of “Wakamurasaki” as a whole, however, we can trace its more appropriate source to the section 155 of *Yamato Monogatari*, where the same study piece is put to use

as well. Why has not *Yamato Monogatari* (i.e., narrative) been regarded as an authorial text of *Genji*, while the Waka piece (i.e., poetry) has been so? My purpose in this essay is to argue over the limited nature of textual annotation, analyzing the way *Yamato* is cited in *Genji*, especially in terms of story types.

キーワード

注釈・典拠・引用・話型・想像力

(Annotation, Authorial Text, Citation, Story Types, Imagination)

所属・学位

本学文化学部文化学科助教授 文学修士

Associate Professor, Department of Cultural Studies, Faculty of Cultural Studies at Kochi Women's University (Master of Arts)

1 典拠としての注釈の限界

注釈というのは、当該本文の重要語句や出典等を取り上げてその意味の説明や解説を加えたものである。「源氏物語」の場合、古注などの存在を考えてみるとそれは、作品成立以来何世紀にも渉る読みの歴史の蓄積・集成であると言えよう。ただし、作品の解釈という次元で考えてみた場合注釈という行為、ないし装置には自ずとその限界もあるのではないだろうか。

現行の活字化された『源氏物語』の本文においては、頭注・脚注・傍注というような形式で限られた狭いスペースに、当該場面の重要語句や出典について言説に密着した説明を要領よく盛り込まねばならないという制約がある。その場面以外の場面や巻を隔てた或る部分との関係性などという射程の長い読みや説明に多言を要する注釈者独自の見解などは、遺憾ながら捨象せざるをえないのではないかと推察される。その性格上、近視眼的な説明に終始せざるをえないのは、ある意味ではいたしかたないことである。

小稿で取り上げようとする事例は、或る伝承を持つ和歌とその和歌を共有する歌物語についてである。具体的には『古今和歌集』仮名序所載の手習いの伝承和歌と、その和歌を共通とする『大和物語』についてである。注釈は当該場面の典拠として前者の伝承和歌についての詳細な説明はなされても、後者の歌物語については、言及されることさえほとんど稀であると言えよう。⁽¹⁾場面じたいとしては、必ずしも直接的な関係があるとはいえないのであるから、当然と言えば当然かもしれないが、しかし、このような例は典拠を旨とする注釈という行為、注釈という装置のひとつの限界を示しているのではないかと考えるのである。

2 手習歌「浅積山」引用と光源氏の欲望

瘧病で治療に赴いた北山で藤壺に生き写しの少女を発見した光源氏は、下山した翌日さっそく手紙を送っている。

またの日、御文奉れたまへり。(中略)中に小さく引き結びて、

源氏「面影は身をも離れず山桜心のかざりとめて来しかど

夜の間の風もうしろめたくなむ」とあり、御手などはさるものにて、ただはかなうおしつみたまへるさまも、さだ過ぎたる御目どもには、目もあやに好まじう見ゆ。へあなかたはらいたや、いかが聞こえん」と、おぼしわづらふ。

尼君ゆくての御事は、なほざりにも思ひたまへなされしを、ふりはへさせたまへるに、聞こえさせむ方なくなむ。まだ『難波津』をだにはかばかしうつづけはべらざめれば、かひなくなむ。さても、

嵐吹く尾上の桜散らぬ間を心とめけるほどのはかなさ
いとどうしろめたう
とあり。

(小学館新編日本古典文学全集「若紫」①228～229頁)

光源氏の若紫に対する求愛を尼君は、手習い歌の「難波津」を例にとつて若紫が未だ仮名の続け書き、連綿体すらできないほどだと、彼女の幼さを理由に断っているのである。

「難波津」の歌とは、

難波津に咲くや木の花冬こもり今は春べと咲くや木の花

のことである。

難波津の歌は、帝の御初めなり。

大鸚鵡の帝の難波津にて皇子と聞える時、春宮をたがひに譲りて位に即きたまは
で、三年になりにければ、王仁といふ人の訝り思ひて、よみて奉りける歌なり。

木の花は梅花をいふなるべし。

浅積山の言葉は、采女の戯れよりよみて、

葛城王をみちの奥へ遣はしたりけるに、国の司、事おろそかなりとて、まうけな
どしたりけれど、すさまじかりければ、采女なりける女の、土器とりてよめるな
り。これにぞ王の心とけにける。浅積山かけさへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふ
ものかは

この二歌は、歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の初めにもしける。

(小学館新編日本古典文学全集『古今和歌集』仮名序)

これら二種類の歌が手習いの初心者之歌となつてゐる理由は何かと考へてみると、「難波津」の歌の「冬こもり」の語が、語源的には「(魂の) 触ゆ籠り」の意で魂の増殖と充実を意味しており、「浅積山」の歌も、この歌によつて采女が王の怒りの心を鎮めたというように、どちらも鎮魂に関わる伝承歌だからではなからうか。これらの歌を書く、手習いという書写の行為パフォーマンスを通じ、歌まなびの初心者たちは、自己の気持ちを鎮め心の安定を得たものであろう。

さて尼君の断りに対して、源氏は再度消息をしてゐる。

御文にも、いとねんごろに書いたまひて、例の、中に「かの御放ち書きなむ、なほ見たまへまほしき」とて、

源氏 あさか山あさくも人を思はぬになど山の井の井のかけ離るらむ

御かへし、

尼君 汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき
(同 229 ~ 230 頁)

光源氏と尼君の贈答が手習いの伝承和歌「浅積山」に拠つてゐることは明白で、例えば古注『松永本 花鳥餘情』(源氏物語古注集成 1 おうふう)は、さきに難波つをたにつ、け給はぬといへるによりてあさか山をとしし出

し侍り古今の序の詞を思よせたるなりかけはなるらんはかけさへみゆるの本哥を思なからしかも又とをさかることをかけはなるとはいへりとしており、以降の注釈の次元では典拠として理解されきており、特に異論はないようである。

たとえば玉上琢彌は、

これにより王の御機嫌がなおつたので、めでたいとしたのであろうか、難波津の歌とともに習字に用いたと『古今集』の仮名序に記す。前に難波津も書けないとあつたから、併称される「あさか山」の歌を思い寄せたのである。「あさか山あさくも人を思はぬに」「山の井のかけ」は、皆、この歌による修辭。すなわち「あさか山」は同音のくりかえしで「浅くも」を呼び起こし、「山の井のかけ」は「影」と「かけ離る」との掛け詞である。/ 尼君の返歌、「汲みそめてくやしと聞きし山の井の浅きながらや影を見るべき」は、「古今六帖二」、山の井、「くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみぬる、山の井の水」へ浅いので手ですくえば濁つてしまひ飲めもしない、袖をぬらしただけ、この山の井の水を汲んでみて後悔する。この六帖の歌が、『万葉集』の「浅香山」の歌によつてゐるから、尼君は使つたのである。/ このように、恋歌の贈答は、なるべく古歌を用い、男は熱情を言い、女は疑うと言ふこれが定型である。そして、女はここまでと思つた時、OKと答えるのである。

と説いてゐる。

玉上が指摘するように光源氏は、《前に難波津も書けないとあつたから、併称される「あさか山」の歌を思い寄せたのであ》ろうが、それは光源氏の情念に関わつてくるはずである。そうであるとするのなら、単に《併称される「あさか山」の歌を思い寄せた》という理由だけでは、まったく不十分で、光源氏の心情に即したそれなりの必然的な理由の説明がなされ

ねばならないはずである。尼君が「難波津」と言ったのに対して光源氏が「浅積山」にズラした必然的理由は、単に歌ことばの遊戯的引用の次元にとどまらず、むしろこの「浅積山」の伝承和歌を共通とする歌物語、「大和物語」百五五段の趣向を引用していると読んだ方がよりうまく説明ができるのではあるまいか。つまり、ここでは「浅積山」の和歌が手習いの伝承和歌であると同時に、「大和物語」という歌物語にも共通して用いられているという事実が何よりも重要なのである。「源氏物語引歌索引」等一部の事典類や論文等を例外として、現行注釈書において、この場面の典拠を『大和物語』とするものは、一つとして無い。

この場面の注釈の次元では、「浅積山」はどこまで行っても手習いの伝承和歌という典拠の域を出ないのだ。だが、手習い歌と言いながら「難波津」ではなく、あえて光源氏が「浅積山」を用いたところに、彼の若紫を手に入れたという強い欲望を読むことができるだろう。そのことは、「話型」の問題と関わるので後述する。

3 「影」「面影」の語の共鳴と喚起力

さて、光源氏の贈歌の「かけ離るらむ」には、「影」と「かけ離る」とが掛けられていた。本歌の「かげさへ見ゆる山の井の…」の「影」の語であると同時に、尼君の答歌の「影を見るべき」と照応しているのだが、これらの「影」の語は、光源氏の最初の贈歌、

面影は身をも離れず山桜心のかぎりとめて来しかど

の「面影」の「影」の語と対応しているのだろう。この「面影」の語は実は北山の僧都に、当て推量に若紫の素姓を尋ねた場面で、

昼の面影心にかかりて恋しければ、源氏「ここにもものしたまふは誰にか。尋ねきこえまほしき夢を見給へしかな。今日なむ思ひあはせつる」

と聞こえたまへば、うち笑ひて、僧都「うちつけなる御夢語りにはぞはべるなる。尋ねさせたまひても、御心劣りせさせたまひぬべし。…」

(212頁)

と出てくる、「昼の面影」の「面影」「影」の語と響き合う。このまことならぬ「夢語り(＝騙り)」の場面を、『湖月抄』の「師説」は、「いひ出んもたよりなきに、まことならぬ夢がたりをすと伊勢物語にいへる類也」(講談社学術文庫)とし、以降の諸注、たとえば小学館新編日本古典文学全集の頭注二も、「伊勢物語」六十三段、「つくも髪のお女の『まことならぬ夢語りをす』とある趣向によるか」として、その章段のとの関係性を指摘踏襲している。一步進め積極的に『伊勢物語』当該章段の引用と読むならば、在五中将に対しては光源氏の中将であり、姫に対しては幼女であり、まことならぬ夢がたりをする主体が、女(姫)から男(光源氏)へと転じられ差異化されていることに気づくのである。そして、

百歳に一歳たらぬつくも髪われを恋ふらしおもかげに見ゆ

(新潮日本古典集成)

この「おもかげに見ゆ」の語が媒介となって「面影」↓「昼の面影心にかかりて…」という言説を領導してきたとするのならば、

浅積山影さへ見ゆる山の井の浅くは人を思ふものかは

とは転一步であり、物語の想像力としては「面影」の語が媒介となった喚起力によって、「難波津」ではなく「浅積山」の手習い歌の方が浮上してきたと理解することができるのである。

4 『大和物語』引用Ⅱ女を盗む男の欲望の話型

浅積山の歌が和歌から別のジャンル、歌物語『大和物語』に転換されると、成立の事情も異なった新たな物語(↓物騙り)として提示される。端

的に手習い歌としての呪性は無化される。

むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、
 〈帝に奉らむ〉とてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける
 内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔
 かたち、いとうつくしげなるを見て、よろずのことおほえず、心に
 かりて、夜昼いとわびしく、病になりておほえければ、「せちに聞こ
 えさすべきことなむある」といひわたりければ、「あやし。なにごと
 ぞ」といひていでたりけるを、さる心まうけして、ゆくりもなくかき
 抱きて、馬に乗せて、陸奥の国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃
 げていにけり。浅積の郡、「浅積山」といふ所に庵をつくりて、この
 女をすゑて、里に出て物などはもとめて来つつ食はせて、年月を経て
 ありへけり。この男いぬれば、ただひとり物も食はで山中にゐたれば、
 かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物
 もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちい
 でて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あ
 やしきやうになりけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知ら
 でありけるに、にわかに見れば、いとおそろしげなりけるを、へいと
 はづかしと思ひけり。さてよみたりける。

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものは

とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物などもとめて
 もて来て、死にてふせりければ、〈いとあさまし〉と思ひけり。山の
 井なりける歌を見てかへり来て、これを思ひ死にに、かたはらにふせ
 りて死ににけり。世の古ごとになむありける。

(小学館新編日本古典文学全集)

そして、この『大和物語』百五五段の引用が、『源氏物語』「若紫」巻に
 おける若紫母子の物語総体の骨格を枠取りし生成していることに気づくだ

ろう。

僧都「：故按察大納言は、世に亡くて久しくなりはべりぬれば、えし
 ろしめさじかし。その北の方なむ、なにがしが姉妹にはべる。かの按
 察隠れて後、世を背きてはべるが、このごろわづらふことはべるによ
 り、かく京にもまかでねば、頼もし所に籠りてものしはべるなり」と
 聞こえたまふ。

源氏「かの大納言の御むすめものし給ふ」と聞きたまへしは。すきず
 きしき方にはあらで、まめやかに聞こゆるなり」と推しあてにのたま
 へば、「むすめただ一人はべりし。亡せてこの十余年にやなりはべり
 ぬらん。故大納言、「内裏に奉らむ」などかしこいつきはべりにし
 を、その本意のごとくもものしはべらで過ぎはべりにしかば、ただこ
 の尼君ひとりもあつかひはべりしほどに、いかなる人のしわざにか、
 兵部卿の官なむ忍びて語らひつきたまへりけるを、もとの北の方やむ
 ごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん
 亡くなりはべりにし。へもの思ひに病づくもの」と目に近く見たまへ
 し」など申したまふ。へさらば、その子なりけり」と思しあはせつ。

(212-213頁)

プレテクストとしての『大和物語』とそれを引用している『源氏物語』、
 それぞれ人物の対応を図示すると、およそ次のようになる。

『大和物語』	／	『源氏物語』
大納言	／	故按察大納言
むすめ	／	故むすめ
(帝に奉らむ)	／	(内裏に奉らむ) (故姫君)

孫むすめ
〔若紫〕
兵部卿宮

← 光源氏

女の不遇の死 / 女の非業の死

(男の恋死)

← 若紫の運命は？

『大和物語』の引用という視点からながめてみると、『源氏物語』においては若紫母子二代の物語に引用Ⅱ差異化されているので、それぞれ人物の対応は単純な一対一の対応ではなくて、親の世代と子の世代というふうな、それぞれに振り分けられることで一対二の対応となっている。すなわち、『大和物語』の大納言の娘に対して、『源氏物語』においては按察大納言の娘である故姫君と孫娘にあたる若紫とに照応しており、同様に内舎人も兵部卿宮と光源氏とにそれぞれ対応している、ないしはずらされているといえるだろう。

さらに詳細に相互のテクストと言説の連関を見ていくと、まず、これら三つの物語はいずれも垣間見のモチーフに端を発しており、特に『大和物語』の垣間見た内舎人の心情「心にかかりて、…」と若紫を見た後の光源氏の「昼の面影心にかかりて、…」とは一致しており、前述した「影」の語が媒介となっているものと思われる。

また、内舎人の恋情を誇張した表現「病になりておほえければ、…」という病気のモチーフも、「若紫」巻頭の「瘧病にわづらひたまひて、…」(199頁)という始発の言説に照応している。ただし内舎人は恋のために病になりそうだというの対して、光源氏の場合は逆に、恋が病気の快復の方へとベクトルが向いているという差異がある。

さて垣間見のモチーフは、垣間見た男の欲望を反映しており、物語文学においては見た女性を盗み出す「嫁盗み譚」という話型に連動している。「浅積山」の手習い歌、伝承和歌の表層的な引用という理解ではなくて、歌物語『大和物語』という、歌ことばと散文の引用とを読むことで、この時点において既に巻終盤の若紫掠奪という話の展開を予測し、先取り(カタドリ)することができるのである。

ただし、「嫁盗み譚」というのは、通常結末に不幸が待っているという理解がなされており、まったくの大団円は『更級日記』の「竹芝寺縁起」くらいであると考えられている。⁴⁾

5 「嫁盗み譚」の変相・鏡像としての「継子譚」

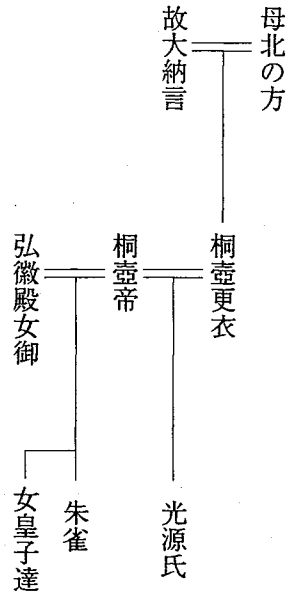
男が女を盗む話が「嫁盗み譚」である。それに対して、男が女を救出する話がある。それは「継子譚」である。一見すると正反対の話のように思われるのだが、実は継子譚も「救出」という名目で女を盗み出すから、嫁盗み譚の一変相であるといえるだろう。あるいはまた、嫁盗み譚と継子譚とは、鏡像的関係にあるとも考えられるだろう。それは嫁盗み譚の掠奪男が、継子譚においてはそのまま白馬に乗り姫君の救済に立ち向う貴公子に転じているからである。

「若紫」巻は光源氏が若紫を垣間見し、彼女を盗み出して養育しようとする話である。と同時に、庇護者である祖母尼君を亡くした彼女が、実父兵部卿宮の邸に引き取られることで予想される、継母北の方の虐めから光源氏によって救出され幸福になる話として、すなわち、継子譚として読むことができるのである。⁵⁾ 言わば前半が嫁盗み譚で、後半は継子譚だということになる。つまり、若紫母子の物語全体が、光源氏の欲望のまなざしからは嫁盗みの話型に沿って話が進行しているのだが、終盤、若紫の庇護者

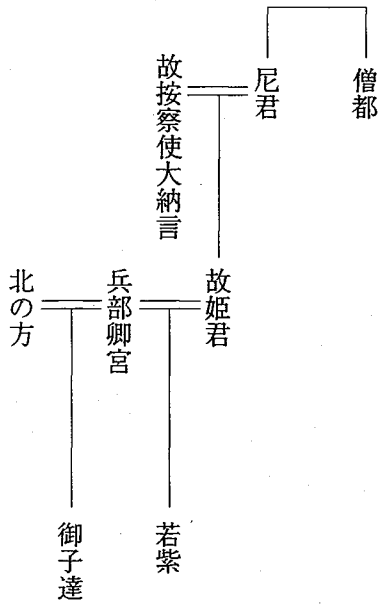
が喪失する時点で、「源氏物語」は話型を切り換え、継子譚に転換しているものと理解することができるのである。

ところで「若紫」巻の人物設定は、阿部好臣も説いているように、「桐壺」巻の人物との重ね合わせとズレによってなされているのである。⁽⁶⁾

【桐壺】



【若紫】



「若紫」巻、「桐壺」巻という相互に反復される〈読み〉の〈時間の循環〉の中で読者は、

環の中で読者は、

- 「桐壺」 / 「若紫」
- 故大納言 / 故按察使大納言
- 母北の方 / 尼君
- 桐壺更衣 / 故姫君
- 桐壺帝 / 兵部卿宮
- 弘徽殿女御 / 北の方
- 光源氏 / 若紫

という人物の対応を読むことになる。そしてその際、「もとの北の方やむごとくなどして、安からぬこと多くて、明け暮れものを思ひてなん亡くなりにはべりにし。へもの思ひに病づくもの」と目に近く見たまへし」(若紫213頁)という故姫君の死の様子を語る北山の僧都のことは、光源氏の亡き母桐壺更衣の死の理由・真相というものが逆照射的に意味づけられるのである。それを聞いた光源氏は、「いとあはれにものしたまふかな」と述べ、また、若紫の養育者である尼君に向かつては、「あはれにうけたまはる御ありさまを、かの過ぎたまひにけむ御かはりに思しないでむや。言ふかひなきほどの齡にて、睦ましかるべき人にも立ちおくれはべりにければ、あやしう浮きたるやうにて年月をこそ重ねはべれ。同じさまにものしたまふなるを、『たくひになさせたまへ』といと聞こえまほしきを、かかるをりはべりがたくてなむ、思されんところをも憚らず、うち出ではべりぬる」(同217-218頁)と同情を寄せた発言をしている。

三谷邦明の指摘もあるように、⁽⁸⁾巻のほぼ始発部分、前掲北山の僧都による若紫の素性明かしの場面に、既に継子譚の話型を読むことは可能である。それは、弘徽殿女御と継子的関係にある光源氏が右の言説にあるように、

若紫の継子の境遇に同情を寄せているという読みに比重を置いた場合においてである。《掠奪は紫上を継子の境涯から救済したいという気持の表現》(三谷) かどうかはともかく、継子譚として読むことで、光源氏の「掠奪」(↓嫁盗み) という行為は、「救済」として意味の転換がなされ正当化される。と同時に嫁盗み譚の不幸な結末も、光源氏が継子譚の白馬の貴公子となることですつかり解消され、大団円となるからだ。これは言わば、話型の誤読的機能といふべきものである。

以上、注釈という行為、ないしは装置の限界の事例として、典拠で指摘されてきた手習歌「浅積山」を共通とする『大和物語』百五五段をプレテクストに、その引用による想像力について話型という視座から論じてきた。舌足らずの論稿となつてしまつたが、ひとまず、筆を擱くこととする。

注

(1) カルチュラルスタディズの視座からすれば、和歌がカノン(正典)であり、物語文学としての『大和物語』はカノンたりえないという意味においては、ジャンルの問題でもあろうが、小稿ではこれについて言及しない。ハルオ・シラネ/鈴木登美編『創造された古典』新曜社一九九九年。

(2) 三角洋一「歌まなびと歌物語」『王朝物語の展開』若草書房二〇〇〇年は、物語創作と享受の場の具体相を、歌まなびの階梯と関わらせて想定する試論である。

(3) 玉上琢彌「若紫」『源氏物語評釈』角川書店一九六八年。95頁。

(4) 嫁盗み譚といえは、『伊勢物語』芥川の章段の「鬼一口」の話(六段)、武蔵野の章段(一二段)、『源氏物語』の「夕顔」巻などが想起されるように、いずれも不幸な結末に結びついている。鈴木日出男「女を盗む話」『源氏物語への道』小学館一九九八年、高田祐

彦「長編の始動」『源氏物語の文学史』東京大学出版局二〇〇三年など参照。なお、立石和弘「言葉と身体女を盗む話型と身体」『女子体育』二〇〇一年五月は、身体論の視座からこの話型を説いている。

(5) この話型から読んだ代表的研究は今井源衛「兵部卿宮のこと」『源氏物語の研究 改訂版』未来社一九八一年(初出一九六二年)だと思われるが、近年では神野藤昭夫「継子物語の系譜」『講座源氏物語の世界 第二集』有斐閣一九八〇年が、《可能性としての継子虐め》という物言いをしていいる。それは、おそらく口承の継子譚と比較した時、『源氏物語』「若紫」巻の場合は虐待のモチーフが欠落しており、その点を考慮してのことかと推察される。

(6) 阿部好臣「明石物語の位置」『語文(日本大学)』41一九七六年七月。

(7) 三谷邦明「古代叙事文芸の時間と表現」『物語文学の方法Ⅰ』有精堂一九八九年、「帯木三帖の方法」『物語文学の方法Ⅱ』有精堂一九八九年。

(8) 三谷邦明「源氏物語における言説の方法」『物語文学の言説』有精堂一九九二年。